

- 近代化百年と現代化百年の経済 -

| | |
|-------|---|
| 著者 | 藤井 隆 |
| 図書名 | 東洋大学創立100周年記念講演集 |
| 開始ページ | 307 |
| 終了ページ | 319 |
| 出版年月日 | 1989-03-20 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1060/00006823/ |



白山キャンパス記念講演会

昭和62年11月18日（水）
白山校舎240番教室

「日本近代化100年と日本経済の進路」

——近代化百年と現代化百年の経済——

日本経済政策学会会長
名古屋大学教授

藤井

隆

はじめに、この大学が三周年を迎えられて、今日、こういう集まりが開かれる。皆さんと共に心からお祝いを申し上げ、共に喜びたいと思います。何はともあれ、おめでとうございました。

よく昔から「学を建つること百年、学を興すこと千万年」と、こう申します。その意味は、恐らく、皆さんは哲学堂へいらつしやつたと思いますけれども、古来、すぐれた学問のスクールというのは、百年を経てようやく歴史の中に生き残るという意味をもつていて考えられた言葉であらうと思います。そういう意味から言いますと、わが東洋大学は、正に、その百年の節目を迎えられた。

私どもの人生のほうでは「三十にして立つ、四十にして惑わず」と、こう申します。ですから、そういう意味から申しますと、わが東洋大学は、正に、人生の花盛り。三十歳にして立つ、学を建つこと百年目を迎えた。これからいよいよ壮年期である。大いに学問を興しましょう。こういう時代になるんだと思います。

創立者の井上先生は二十歳にして学を興そう、学を建てようという覚悟と努力をなさつたわけです。諸君の多くは、すでに二十歳を越えておるかも知れませんが。そういう意味では「俺は到底井上先生に及ばないや」と思う人がいるかも知れませんが、現代は幸いにして人生五十年から八十歳の時代になったわけですから、諸君の歳に五分の八を掛けると、三十二歳にして「俺は井上先生と同じことをやりやいいんだ、まだ若干時間があるわい」と思われる人もいるかも知れない。

しかし、いずれにしても、この百年の歴史の中で東洋大学の今日の発展の時を迎え、諸君は、同世代人として共にその百年の節目を喜び、やがて

将来、諸君が社会に出た後に、「おい、われわれは百年の時に一諸だったな」ということが出来る仲間としてここにおられる。自分の人生の中で、そういう大きな節目を共にした仲間というのは、大変いい仲間であります。

これは、「ヨーロッパで一番長い日」という映画がありますけれども、人生において、そういう大きな節目、大きな強烈な経験というものを共にするということは、非常に重要な活力の源泉であり、自分の人生の一つの一里塚を共にしたということになるわけであります。そういう意味で、私は、これから学を興すこと千万年という、そういう東洋大学に今ここに立っているという意味でも、諸君と同じように喜びたいと思います。

問題は、その百年。われわれは、この現在の百年をどう考えるかという時、先ほど、建元先生から「世界における日本の百年」という大変有益なお話を承りました。私たちの先祖は、井上先生だけでなく、この百年の間、世界に向けて日本がどういう国になればいいか、われわれはどういうように生きていけばいいか、いろいろな苦心をされたわけであります。

そして、今、われわれは、これから百年、われわれはどういうように、自らの人生を作り、日本の社会を作り、そして、地球の経済を運営するか、そういう状況に今ある。諸君は皆同じその戦列にある。こう考えた時に、この百年の意義、そして、次の百年の意義、これを、もう一度、一緒に考えてみようではありませんか。これが、今日、私がお話をする内容であります。

そこで、そのことを極めて際立って申し上げるために、私は、今までの百年は、近代化の百年、これからの百年は、現代化の百年である、こういうことをまず最初に申し上げたい。そして、なぜ近代化といい、なぜ現代

化というか。そのところから一緒に考えてみたいと思います。

近代化ということを言う時に、私たちがすぐ思いますことは、先ほどのお話にもありましたように、ヨーロッパの近代化のモデルをいかにいち早く学び取り、それに立って世界に伍していくかということであったと思います。

それでは、一体、ヨーロッパの近代化というのはどこからスタートしたんだと、こういうことをわれわれは考えなければならぬでしょう。哲学堂へ行くと四聖人が祀ってありますが、また、本学の建学の精神として「哲学をもって始めとす」ということがあります。学の始まりは哲学にある。正に、そうだと思います。その哲学の基礎というのを考えてみますと、いろいろな言い方があると思いますが、それは、人間の一つの宇宙観、そして、そこから出てくる世界観に裏付けられた大きな体系というように見ることも出来るかと思っています。

仏教の曼陀羅ではありませんが、百年を越えて生き残った人間の思想の体系、社会のあり方、それらは、それぞれにそういう一つの哲学体系を基礎に持っている。言葉を換えて言えば、宇宙観、世界観を持っている。こう考えますと、近代の始まりというのは、やはり私は「人間が地球は丸い」、あるいは「地球は動く」。こういうように理解することが出来たところに求めるべきではないかと、こう思います。

それ以前は、仏教の曼陀羅のように平面的な秩序であったわけでありま。知識の秩序という言葉を使うこともありますけれども、そういう考え方が支配していた。その中において、「地球は丸いぞ」「動くぞ」と。そして、太陽系の中でと、こういう発見。この宇宙観の変化というのが、実は、

人間の世界観を変えた。

その最初の現れが、その新しい人間の知見に基づいて、巨大なる海を越えて漕ぎ出して行つた大航海時代の始まりということになり、やがて彼らが持ち帰った富が、単なる消費や商業でなく、集中的に投資されるようになった時に、われわれは産業革命へということを経験したではないか。こういうように考えることが出来ます。

それまでは人間は、農業を中心に生きていた。あるいは牧畜を中心に生きていた。もちろん、商業もありましたけれども、メーンはそういうことだったわけです。このことは、今日、私たちが考えてみましても、よく分かるわけですけれども、まだ私が幼いころには「土地を持たない人は貧乏人だ」「あいつは五反百姓のせがれでな」というようなことがしばしば聞かれたわけなのです。

これに対して、産業革命から数十年後に確立されていく資本主義のものの考え方というのは、「土地は持たなくても、一生懸命働いて資本を蓄積すれば豊かになれるよ」ということを教えてくれたわけですから、当時の人々にとっては、非常に大きな革新的な事柄であったと思います。

やがて、それが、持たざる人はますます持てなくなる。持てる人はますます金持ちになるというような分配や配分の問題を生んだ時に、新しい課題が地球上に生まれましたけれど、少なくとも「土地は持たなくても、資本を貯めれば豊かになれるんだよ」というのは非常に大きい変化であったと思います。

そういう意味において、農業時代の貧しさからの脱出という中で、物質文明が栄え、物質に中心をおいた、物中心的な考え方が生まれてくるとい

うことも分からないわけではないわけです。その背景になったのは、当時で言いますならば、新大陸の発見とか、そういう地上における新しいフロンティアの発見であつたわけであります。

これが、今日、どのように変わったか。最早、地上にはフロンティアはないとか、最早、偉大なる西部というようなものはないんだというようなことから、世界は、やがて長期停滞に落ち込むであろうというような悲観的な見方がかなり大きくあります。本当にそうでしょうかというのが、今日、もう一度考え直さなければならぬとされていることであります。

そこで、この百年のターニング・ポイント、東洋大学が時恰も百年祭を祝つたこの現代の時点というのは、そういう宇宙観や世界観という意味から言つたらどうでしょうか。これを考えましようというわけです。

最近、私は、たまたま名古屋大学の学長が天文学の先生でありますので、ご一緒に仕事をしたことがありますけれども、現代は第二のコペルニクスの時代である。現代は新しい宇宙観が生まれようとしている時代であるというのが彼らの主張であります。どこが違ったのかということをいいますと、長い航空機の発達や宇宙開発の時代を経て、人間が、自分が生きている地球の外から人間を見ることが出来るようになった。

ロシアの有人衛星の中で「地球は青い」ということを送ってきた人がありますが、そして、その青い海原の中で「自分がかめめのだ」というように言つたというような話もありますけれども、外から地球を見ることが出来る時代になった。

それと同時に、銀河系を越えて宇宙が進化していく姿を人間が理解することが出来る時代になった。さらに、太陽系そのものも一つの生きものと

して考えられる。その中の小さな一つの惑星である地球は「人類にとって掛け替えない地球、人間社会の存在条件としての大事なものだ」という認識が世界の共通のものになった。これは七〇年代の国際環境年、国連の活動が大きな意味をもつたと思いますけれども、そういう中で生まれた共通の理解であります。

さらに、われわれは、先ほどの天文学の話ではありませんが、自分が理解出来る時間の単位について、非常に「巨大な、先ほど「学を興すこと千万年」といいましたけれども、千万年にもう一つ光という字をつけて、千万光年のことまでも今日の電波望遠鏡では理解出来る。こういう時代になった。そうして考えますと、地球を外から見る事が出来る。

宇宙への開発というのは、同時に、地球を外から見と一緒に考えるということでありますから、宇宙開発という新しいフロンティアを人間が見つけた時に、それは新しい世界観を生んだ。どういう世界観だろうか。

まず、よく言われることは、今言いました存在の条件について共通の理解が出来た。次ぎはどうか。日本の開放による国際的な進出とか、その他諸々の従来の世界の中で、ヨーロッパのアメリカ大陸における進出等の場合もそうですけれども、伝統的な人間の暮らし方、経済のあり方をそのまま押し広げていくという形で、インディアンを相手に騎兵隊がたたかうというような、そういう形では考えられなくなった。なぜならば、地球の外に出て人間が暮らさなければならぬということになると、その暮らし方もいろいろ考えなければならぬ。

それと同時に、今度は、その裏返しとして地球上の人間の暮らしも、外から見てみるとあまりにも小さいな、「もつと違った暮らし方があるよ」

ということが出てくるわけがあります。そういう中で、先ほど、シュンペーターの革新のお話がありました。そういう産業革命、資本主義時代を通じて栄えた工業化の発展の論理というのは何であつたか。それは、生産要素としての資本を使う、資本に依存した人間社会の建設であつた。

ところが、その過程というのは、当然のことでありすけれども、大規模有利の第一原則、第二原則というように「大きいことはいいことだ」という議論があります。ですから大量生産、大量消費ということで工業化は発展する。こういうことになってくる。

今日、わが国や先進諸国では、ある豊かさの水準を達成し、やがて長寿社会を迎えようとしている。しかし、なお、これから工業化をすすめるようとしている国は、さらなる人口爆発、人口の若年化というようなことをやっている。そして、工業化をすすめるようすればするほど、ますます人口が増えて、貧乏で食えなくなるといふような問題も生まれている。そういうように、新しい時代に入った世界の地域と、これから近代化をという段階にある地域とが両方生まれてきた。これが世界の南北問題ということだつたわけです。

ところが、この関係がさらに変わろうとしてきた。どういふところから変わろうとしてきたか。一つの例を挙げるといふか、それが大きな条件であらうと思いますけれども、技術の開発の重点が、従来の拡大型の技術、大量生産型の技術だけではなくて、進化型の技術、ディープニング・テクノロジーといひますけれども、身近な例で言つと、五ミリ掛ける六ミリの小さい空間の中に、何万ビットといふものを入れるといふような、そういう技術、これは明らかに、わが国だけではありませんが、地球上のわれわ

れが資源やエネルギーについて、これからどうしたらいいんだということ考へた時に生まれた技術であります。

そういう技術を中心に、通信や、あるいは宇宙開発のためのさまざまなシステムや、われわれの身近で言うならば、今までは電話しなかつた。それも有線電話、やがて無線電話になり、衛星通信を使つてといふようになつていくといふように、ディープニング・テクノロジーが生み出した成果が、地球を一つのネットワークとしてカバーするようになった。

そうなると、南北の関係も、また、そこで大きく変わるではないかといふことが出てきます。なぜならば、今までは、電線を引かなければ都市施設としての電話は出来ませんでしたけれども、現代では、自動車電話を考へればすぐ分かりますが、アマゾンの奥地だろうと、砂漠の中だろうと、必要なら電話の都市設備を作つて世界の通信に寄与すること、つながることが出来る。

地球を外から見た時に感じたように、この増大した人口、言葉を換えて違つた表現をすると、建元先生がお話の明治の初年には三千万の人口であつた。現在は一億二千万の人口を日本は養っている。当時、われわれは歩くスピード四キロメートル、馬で力いっぱい走つて二十キロメートル。現在では、車の速度は多くの場合、四十キロです。新幹線がようやく二百キロであります。ですから、スピードは十倍になつた。そうすると、大体、単純な掛け算で言つと、三百倍、四百倍ぐらいに他人と顔を突き合はす確率は増えたことになります。

ですから、地球上の人間はお互いに一人一人が他人と無関係に生きることは出来なくなつた。これは非常に大きな変化であります。ですから、地

地球上が大きなネットワークでカバーされ、人々の相互依存性は非常に増大した。昔の平家の落ち武者のように隠れ里を営んでというような農業時代の発想は通じません。

こうなってくると、そこに新しい議論が出てきます。つまり、そんなにしょっちゅう人とぶつかるのだつたら、これは到底喧嘩をしておれないぞ。どうすれば皆仲良く、お互いの人格、主体性、アイデンティティを尊重してと、こういうようにならざるをえない。これが世界に民主化の傾向を強く打ち出してくる背景でありますし、お互いにその中で自分のエゴだけでなく、社会性や公共性を考えながらやっていくという時代になったよ、ということが言える背景であります。

そういう中で、私たちの社会がどういうように変わったかということを考えなければならぬ。これが今日の百年目のターニング・ポイントで、世界が、ヨーロッパから始まって世界へ広がっていったという近代化ではなくて、宇宙飛行士が空から見たように、一つのグローバルな人間社会としてわれわれの社会を再構築していかなければならない時代に入った。そういうターニング・ポイントではないか。これが宇宙観や世界観という哲学の変化から始まった現代のターニング・ポイントの理解であろうと私は思います。

それでは、そこではどういう変化が起こるのだろうか。簡単に現代化というけれども、確かに現時点は現代に違いないが、今後、百年に起こりうる現代化とは、一体、どういうことなんだろうか。このところが、先ほど建元先生のお話にもございました情報化、国際化というような新しい時代の条件の中でわれわれは生きている。こういうことであろうと思います。

そうすると、一九七〇年代には、人間の社会の存在条件を守らなければいかんという共通の理解が出来て、世界の平和とか、環境を守ろうとか、そういう話がまずは大義名分となった。さて、今後はどうか。こうなると、今世紀末、われわれが当面している人類社会最大の課題は何か。一体、どうすればこのせせこましい地球社会の中で、お互いに喧嘩をしないで経済発展を実現出来るだろうか。国際摩擦、国際摩擦と騒ぐのは勝手にすけれども「騒いでいるだけではどうにもなりませんよ。一体、どうすりゃいいんですか」ということを考えなくてはならなくなった。

そういう中で、新しい変化としてわれわれは、先ほどもいいましたが、お互いに主体性を尊重する。これは身近なケースで、個人で言えばそうでありますけれども、企業について言えば、最近、コーポレート・アイデンティティ、わが社らしさは何か、就職説明会に来る企業の人が一番に言うのはそこあります。「諸君、わが社らしさはここにある、ぜひ来たまえ」。釣られていく人もいろいろいるかも知れませんが、地域についても同様であります。わが町らしさ。

それは翻って言えば、日本らしさは何か、アメリカらしさは何か。これは、広い意味で言いますならば、今や世界もまた地方の時代が始まった。

「ソビエト?、ソビエトだって連邦じゃないか」「アメリカだって United States だよ」。皆、それぞれのアイデンティティを尊重しながらやっていくということでアメリカ合衆国は民主的憲法を作り、連邦を作ったんじゃないか。何でアメリカが世界の摩擦を解消して、世界仲良くということにならんかいなと、いろいろな問題がそこに出ています。

そういう時に、私たちは、そうだとすると現代の特色というのは、そう

いうアイデンティティ、さまざまな主体性の間のコミュニケーションの問題をどう解決するかということで考えなければいけないのではないか、というように考えるようになります。そして、このことが、実は、極めて重要な今日の情報化のポイントであります。われわれはコミュニケーションを通じて何を求めるか。明らかに、それは「情報」という形で表現される移転可能な、伝達可能な知識の要素を獲得することにあります。

そういう意味で、マーケットを考えると、商品を通じてわれわれは情報を得ているということが言えますし、市場メカニズムというのは、正に、コミュニケーションの結果であり、市場の行動とは、コミュニケーションの一つのやり方であるということも出来ます。

そこで、一つの考え方が出てまいり、私たちは、コミュニケーションをした結果、新しい情報が得られる。ところが、この情報というのは、万人同じ価値を認めるとは限らないわけです。受けた人が価値評価をするのであります。工業の場合には、生産物の価格は、コスト、マージアップ、つまりコスト、プラス、利潤というような形で決まりましたけれども、情報の場合には、受け手によって評価が違います。

経済学は需要供給に始まり需要供給に終わるといわれておりますけれども、工業の時代には、価格は供給側がコストという形でどうやら決まっていた。新しい時代には、どうやら再び生産者と需要者、供給者と需要者という格好で価値が決まるような、そういう社会になりそうだなということがお分かりかと思えます。

それでは、獲得した情報がどういう意味を持つか。ここのとこが当大学の伝統の中で私は、極めて重要だと思っております。私は、諸君に配っ

たレジュメの中で「知識主義社会」という言葉を使っておりますが、知識主義というのは何も今日に始まったわけではなくて、プラトンの時代から、カントの時代から、哲学の課題としては非常に古いわけであります。

問題は、それが、今日、頭の中だけではなく、データバンクや情報のネットワークや、あるいはさまざまなデータプロセシングの方法を通じて、先ほどのディープニング・テクノロジーの成果として、人間の頭から外へ出て社会科学の課題になった。ここは非常に大きな変化だと申し上げるわけで、その意味で現代を知識主義社会と、こう考えましょうというわけであります。

個人が情報を得て、頭の中で知識を生産するというのは、古来からの知識論のように、頭の中にある知識の秩序の中に新しい情報が加わった時に、私たちの頭の中でガチャガチャッと、その秩序が組み換って新しい秩序としての知識が出来上がる。「あの人はいい人だ」と思っていたけど、あんなことをするのは見下げた人だ」と、一朝にして評価が変わる。逆に、彼女がほんのちよっと、にこっと笑ってくれただけで、ガチャガチャッと頭の中の秩序が変わってしまう若い諸君もいるはずであります。

そういうように、頭の中の知識は増殖したり、陳腐化したします。これがコミュニケーションを通じて組織内に出て、グループ内に出てまいりますと、そこにグループ内での知識生産が行われ、今日では、そういうことを支援するために、インターネット・ジェネス・ビルディングとか、オフィス内情報コミュニケーション支援組織というようなものが出来る。

今度は、グループや組織の間でどういうように知識生産が行われるか。そこでの情報のやり取りは、明らかに情報市場を通じて行われている。さ

もなくば、ジョイントベンチャーとか、いろいろな調整によって行われている。これが現代の知識生産の個人のベースから組織の中に出、そして、それが社会的知識生産にまで広まったということの背景であります。

そういうように考えると、私たちが、これから生産力としてよって立つ基盤は、資本から、そういう新しく生産された知識に移るはずであります。事実、私たちがそれぞれ、例えば、十億円ずつ出して会社を作ったとしても、払う賃金は春闘相場並み、支払うべき配当は業界相場だ。違いはどこにあるかという点、それぞれの会社が、どういう技術者を集め、どういう社員を集め、そこでいかなる知識生産、技術的開発を行って、その企業のシステム・ネットワークを拡大するかということにあるかと思っています。そういう意味で、現代は新しい変化をしております。

配りました資料で言いますと、「ストックによるストックの生産」という絵を見ていただきますと、その変化が分かるかと思いますが、かつて、資本の時代には、資本は労働と結びついて生産力でありました。今日、集積された情報やデータバンクは、それを動かす知識生産をする多くの人たちと結びついて、これは、既存の知識と結びついて新しい社会的知識生産が行われる、こういうわけであります。

俗に言えば、先ほどの例に、「お金はなくても一生懸命勉強すれば豊かになりますよ、といういい時代になったから、諸君勉強しなさいよ」と。しかし、その勉強は、諸君が、例えば、あの人は三時間勉強しているから、俺は四時間勉強する。これでは決して良くならない。優れた知識の蓄積と結びついた時に初めて良くなる。だから、いい先生方を東洋大学でたくさん持っておられて、諸君に優れた講義をしていただける。学校へ出ていろ

いろなことを聴くことが、諸君の先人が、その情報を獲得するために費やした時間を諸君の人生に継ぎ足すことになるんです。「大いにやんなさい」という話になりますが、そういう時代になった。

浅野先生と先ほどお話をしていたのですが昔、フランスのケネーという人の時代に、物的な生産、物だけではなくて「サービス」という生産活動も人間にとって大事なんだということで経済表が考えられた。今日では、それにもう一つ加えて「情報や知識というものがありますよということになったですよ」という議論をいたしました。

それが、四番目の「知識主義経済の経済循環」というところを見てもらうとよく分かると思いますが、そもそも物をわれわれが持ちたいというのは、いつの日か、それを使おうと思うから持ちたいわけであります。「タイプライターが欲しい」「ワープロが欲しい」というのは、ワープロを使う時に、ちゃんと手元に機能するワープロがあるということ欲しいわけです。

田舎の生活で、「納屋の中にブリの一匹も吊るしておかなければ貧乏人だ」といわれたのは、ブリを食べたいと思っても遠くまで買いに行かなければならない。だから持っていたわけです。今日の都会生活では、わが家の食生活の在庫管理は隣のスーパーに任せてあります。一切れでも決して恥ずかしくありません。こういうようになっていく。つまり、そこには、われわれが物が欲しいと考える欲望から、よく考えてみると「持って死ねるわけじゃなし、生まれた時は裸だよ」「持っていたところで、相続税を取られるだけじゃないか」「それならば、われわれは、それからどうサービスを引き出すかということを中心に考えたらいいではないか」。これが

第二段階の欲望の内容をサービスを中心に考えてみたら、経済はどうなるかということであります。

ここで、皆さんに一つの概念を明確に覚えておいていただきたいと思ひますのは、今、言いましたが、産業構造のサービス化、情報化というのは、一番上の、物とお金のやり取りという段階の中での構成比の変化であります。これに対して、経済のサービス化というのはそうではございません。欲望の内容を、物が欲しいという欲望からサービスを経験したいという欲望に変えてみた時に、経済はどういう流れになるか。これをケネーの経済表で表現したらどうなるか。いろいろなやり方があるかと思う。

ところが、さらに、次ぎが問題です。われわれが物を買うのは、その物が必要な時にサービスを提供してくれるウエーティング・キャパシティ・オブ・プロダクション、待機生産力であると考えからでありますけれども、それでは、われわれはいろいろなサービスを経験した中で、そこから人生に何をつけ加えるか。「ああ、面白かった」というのもあるでしょう。しかし、いろいろな新しい知識をつけ加える。

言葉を換えて言いますと、サービスをわれわれが受容するのは、そこからわれわれが人生にとって有益な知識を獲得出来るからであり、人生を楽しくする経験も獲得出来るからであると、こういうように考えることが出来ます。そこで、サービスとは情報の待機生産力であるという見方も成り立つわけであります。

じゃ、そのレベルでもって経済全体を考えてみたかどうかというようになるか。それが一番下の段階であります。すなわち、最も信頼の出来る情報を獲得出来るような社会が大切だということになるわけであります。ですか

ら、私たちが、そういう新しく定義された形でみた経済の情報化ということと言う時、これを技術系の人たちは「高度情報社会の到来」というように言います。これはハードの側面から見ればそうでありましよう。

そこで、わが東洋大学において哲学が基礎であるという意味において、私が取えて知識主義ということを重ねて申します。その理由はどこにあるか。われわれ社会科学者にとっては、哲学や思想なき社会の運営はあり得ない。これは経済政策の場合、いかなる哲学にとって自らの生きている社会を運営するか、大変大きな問題であります。ですから、それはあり得ない。

そうだとするならば、新しく高度情報社会が来るというならば、そこではいかなる思想があり、いかなる哲学があるか、これを考える。それは、明らかにコミュニケーションを重視する。先ほども申しましたように、人間の目でもう一度社会や経済を見直そう。アメリカにヨーロッパから経済学が移った時に、その視点は失われたといってもいいかと思いますが、日本のわれわれは再びそれを取り戻そうではないか、こういう話にならざるを得ない。

そういう意味において、私は知識主義という時には、三つの内容がある。一つは、いかなる思想か、人間に帰って考えよう。もう一つは、理論であります。かつて、資本によって資本を蓄積するという資本主義があった。今日、われわれは知識によって知識を蓄積して行こうという理論をそこに持つことが出来る。さらに、そういうことをやるためには、私たちは、スムーズな情報の社会的な流れを必要としている。信頼出来る情報を獲得出来る社会というのが大切な社会である。

言葉を換えて言いますと、道の一つ聞くにしても、一回聞いたら行ける社会と、何人かに聞いて、三人のうち、例えば、二人が同じことを言ったから、そっちへ行くんだというようなことをやらなければならない社会と、どっちがいいですか。そういうことを考えますと、信頼出来る情報の流れる社会を作ろうということが大変重要であるということになります。

そのことは、取りも直さず、私たちが、お互いに信頼出来る関係を日ごろから作っておかなければいけないということになって、掛け替えのない地球を守ろうということが、環境を守ろうということであるならば、私たちは信頼出来る情報が流れる社会を、社会環境として日ごろから作っていくことに努力を掛けていかなければならないということになります。

そういう中であって、私たちが運動として考えることが何かというと、福祉社会を越えて、信頼社会を作りましょうということであります。これは、所得を分け与えて、至れり尽せりにしたら、老人は返って悲観して死んでしまうかも知れない。それよりも、お互いのアイデンティティを尊重した、いいコミュニケーションの信頼社会を作りましょうということが大切だ。

実は、このことが、これからの情報の流通する経済において重要だということと、意味は、かつて、江戸時代から商人道とか、あるいは商売道德とか、哲学とか、いろいろ言われてきた。そういう倫理的なものというようなこととして、物質的な経済の中では外されていた問題を、これからの社会では、それこそがわれわれの経済循環を支える基礎的な条件であるとして考えていかなければ、いい商売は出来ませんよ。これは、商業をやっている人に言わせればあたり前であります。「暖簾を大切にしよう」「お客

を大切にしなければいい商売は出来ませんよ」、同じであります。

今の日本にとって考えれば、日本が、加工貿易国で輸出をして伸びていくと思うならば、お客様である諸外国に豊かな国になってもらえなかったら、日本の商売はだんだんじり貧になるわけです。ですから、いろいろな国に援助も必要でありますし、やらざるばかりではなくて、いろいろな国の経済発展のために、その国へ行つて頑張るとか、いろいろなことを必要とする時代になったわけであります。また、出て行くからには、世界中から優れた人が日本に来てもらわなければ困るよ、という時代になったということでもあります。

今日、国際摩擦云々という議論がかまびすしいのでありますけれども、日本が、これから世界に向かって呼び掛けていくことは「信頼社会を作りましょう」ということであらうかと私は思うわけであります。それが、正に現代化の経済活動であり、現代化の経済社会を作る行き方ではないかと思ひます。

「フーモア・ヒロシマ」という平和運動は「戦争をしますまい」という話で、ネガティブな考え方でありますけれども、「世界に信頼社会を作りましょう」というのは、誰も反対出来ない大きな平和運動でもあるわけであります。

これに対して、さらに言いますならば、そういう中では、私たちが、かつて、資本の時代に、社会資本とか、民間資本とか、その適正な比率が私たちの社会経済の運行を支えると、こう考えてきましたけれども、それに対して、私たちが共通に持っている知識の蓄積とか、さまざまなレベルの企業グループや、組織や、その中にある知識との組み合わせがどういよ

うになるかというのも大変重要だということになります。

そこには、普及教育と専門教育をどういうように社会で考えた方がいいのかというような問題も含まれております。そういう意味において、この新しい百年を迎える時に考えるべき現代化の内容には、現代の教育体制の組み換えというような問題も、当然、入ってくるわけであります。

さらに、言いますならば、その中で、それでは新しく技術、知識の時代になったら農業は無くなるか、工業は無くなるかという点、決してそんなことはありません。その右の表にあるように、現代化の中では、農業は工業化し、情報化いたします。工業も生物化し、情報化いたします。F A などというのは正にそうであります。

その反対に情報産業はどうか。O A のように工業化いたします。さらに、生物化もいたします。最近では、データバンクを作る時に細胞にデータを覚えさせて、餌をやっておけば、永久データバンクではないかというような研究もあります。

このことは、かつて、自動車産業が、やがてプラスチック産業や電子産業と融合して、ヒュージョンといいますが、新しい産業として生まれ変わったというのと同様であります。私たちは、しばしば古い産業分類の統計で単純に自動車産業というのは輸送機器産業の一つと考えますが、その内容は大きい違うわけであります。ですから、国内の産業構造においても、そういうようにヒュージョン、デヒュージョン、融合と分離を繰り返して産業構造が変わっていきますが、全体として日本らしい産業構造をそこに生み出そうとしている。これが現代の日本の産業の状況であります。

そういう中で、私たちが経済活動が続けていけば行くほど、これから先

も、ますます新しい知識が集まってくるし、必要になるでありません。そのことがわれわれの行動を変える。そして、その結果が経済の循環の内容を変えようというようなことがあるとすると、そこにわれわれの社会は何回かの長期な波動を繰り返しながら変わって行くんだな、ということが分かります。

そして、また、先ほど、建元先生が仰ったように、世界が一つのネットワークでつながれば、世界三本社制、企業は二十四時間、われわれは四時間というような状況が出ますと、経済の循環の中で動く量というのは、大変大きな量が集中的に動くわけであります。世界のお金が一個所にわっと集まる、物がわっと集まる、情報がわっと集まるということが地球上の人間の経済にどういう長期波動を生み出すであろうか。お話を承った通りであります。

しかし、われわれの生活の中で、われわれは豊かになるとともに、何をやってきたか。八さん、熊さんは宵越しの金は持たないが故に江戸っ子であるといいましたが、私たちは大きな手持ち現金残高を考えることも出来るし、在庫の変動も耐える力を持っている。世界の長期波動にも耐える力を、今後、さらにつけていくにはどうしたらいいか。そういうような大きな調整の課題にこれから直面していくでありませんか。

私たちは、そういう場合に、これを経済循環というのは私たちの社会を動かす動力を作ると、こう考えますけれども、そういう大きな地球社会の変化というのを「発展循環」というように考えまして、外から見た地球が一つであるとするならば、そして、それを新しい情報時代のネットワークがカバーしているとするならば、その地上のさまざまな発展循環を、どう

すれば調整していけるかということを考えなければならない。こういうようになりす。

もう一つ大きな課題は、私たちが宇宙へ出て行くことは、かつての話で言いますならば、外へのフロンティアの拡大であります。しかし、その一方で、マイクロテクノロジーというのは、われわれの周りにDNAの組み換えであるとか、さまざまの内でのフロンティアを開きつつあります。

これを外へのテクノロジーと、内部へのフロンティアと、こう分けて考えるといえますと、人間の活動領域は近宇宙にまで及びましたけれども、もう一方では、われわれは、ミクロからの再構築ということで地球社会の再構築を考えなければならないというような必要も出てきます。この両者をどのように調和させるか。恐らく、諸君が三十歳、四十歳、今、正に、全責任を持って自分の生きている社会を運営していこうという立場に立った時に、当面する課題が、そこにあるかと思えます。

かつての近代化百年というのは、この新しい現代化百年の極めて重要なターニング・ポイント、トランジトリイの移行過程の一節である。こう考えなければならぬ。

私は、諸君とともに東洋大学三年のお祝いに参画して、この大きなターニング・ポイントにおける一時を共にしたことを、大変、私の人生においても大きな経験であつたと喜ぶものであります。

諸君も、どうぞ、これから新しい時代へ向けて頑張ってくださいと思います。今日はこれでお終いにいたします。

講師紹介

藤井 隆

昭和四年 岡山県生

昭和三七年 一橋大学大学院経済学研究科
博士課程修了

昭和三八年 名古屋大学経済学部講師

昭和三九年 同助教授

昭和五一年 同教授

日本経済政策学会会長
日本学術会議会員

専攻 経済政策

学位 経済学博士

著書

「競争と協力」

「国際的産業再配論」他